



自宅の庭で、愛猫ボーンズ君
とくつろぐホーグランドさん



文化の翻訳を通じて見つめる 日本とアメリカの「戦争と記憶」

映画字幕翻訳家

リンダ・ホーグランドさん

黒澤明、宮崎駿、黒沢清、是枝裕和など海外に固定ファンを持つ監督をはじめとし、
これまで150本以上の映画の英字幕翻訳を手がけてきたリンダ・ホーグランドさん。

「日本人とアメリカ人、どちらでもあるし、どちらでもない」

そう自身について語る彼女は、18歳まで日本で育ったバイリンガルだ。

両国の間で何を感じ、何を伝えようとしているのか、話を聞いた。



WEB

Linda Hoaglund Website
<http://www.lhoaglund.com/>

ホーグランドさんがこれまでに字幕を手がけた日本映画の一覧やプロデュース作品、執筆などの仕事を日本語と英語で紹介。記事中で取り上げたドキュメンタリー「日本鬼子(リーベンゲイズ)」の一部も試聴可能。



A WAY OF LIFE

文化の翻訳を通じて見つめる日本とアメリカの「戦争と記憶」

映画字幕翻訳家 リンダ・ホーグランドさん

日本には建前と本音がありますから、 建前で言ったことをそのまま翻訳すると、 日本人がその映画を見たときの理解と違ってしまいます。



学生時代から大島渚監督作品の大ファン。1999年の作品『御法度』は、製作中に「字幕をやりたい」と監督に「直訴」した。

PROFILE

リンダ・ホーグランド

Linda Hoaglund

アメリカ人宣教師の娘として京都で生まれ、西日本各地の地方都市で育つ。アメリカのエール大学を卒業後、フジテレビのニューヨーク支社、独立プロダクションで番組コーディネーターやアシスタントプロデューサーとして活躍する。1995年から日本映画の字幕翻訳を始め、現在は年間15本以上を手がける。村上隆「リトルボーイ」展のカタログ翻訳や、日本人映画監督、芸術家の通訳などその活動は多岐にわたる。特攻隊の生存者に取材したドキュメンタリー「太陽の彼方」(原題:Beyond the Sun: Legacy of the Kamikaze)はプロデュースも手がけ、2007年公開予定。

子供心に感じた、 不自然さ、居心地悪さ

京都に生まれ、18歳まで山口県や愛媛県の都市で育ったそうですが、当時、日本の社会をどう感じていましたか？

中学までは普通の公立学校に通っていて、子供心に「ガイジンだ」としよっちゅう言われるのが嫌でしたね。日本とアメリカは、アンバランスな関係でしょう。アメリカは、戦争に勝って日本に基地をずっと持ち続けている。未だに沖縄は半分以上基地だし、アメリカが「戦争に行くよ」って言ったら、日本は反対しないで自衛隊をイラクに送る。60年代安保(※1)にしても、国会の中に警察が入って安保反対派の国会議員を追放し、無理矢理アメリカが日本に基地を持っていいと決めた。言ってみればクーデターですよ。少し目を開くと、すごく不自然な関係だというのが見えてくる。

当時から、(日本に住むアメリカ人として)何か居心地が悪いというか、おかしいな、不自然だなと、子供心に感じていました。大人になってそういった歴史を勉強して、その理由を理解した、という感じですね。

60~70年代の日本映画を見ると、矛盾だらけの社会がちゃんと描かれていますよね。深作欣二監督の「軍旗はためく下に」とか、黒澤明、今村昌平、大島渚らの監督作品にも。

大学進学で初めてアメリカに住み始め、アメリカの社会に慣れるのに苦労した点は？

アメリカは、「私これをやりたいから、こうしよう」と、はっきり伝えてもよい社会。それに慣れるのに、時間がかかりましたね。日本では、直接自分の希望を伝えるのは失礼だから、まず、自分の欲しい物を手に入れられる状況を作りますよね。「じゃ、ちょっと電車に乗りましょうか」

と言って、駅を降りたら「あ、私の行きたいお店がちょうど近所にあった」みたいな。アメリカで同じことをしたら、「最初からそこに行きたいって言えばいいのに」と言われますからね。

目指すのは 「字幕を意識させない字幕」

日本映画の字幕翻訳家として、150本を超える作品を手がけられています。語学力以外に、字幕翻訳に大切なスキルは何でしょうか？

日本映画の場合、文化と風習、それから日本人同士のコミュニケーションの取り方を深く理解していることですね。日本には建前と本音がありますから、建前で言ったことをそのまま翻訳すると、日本人がその映画を見たときの理解と違ってしまいます。表情や声のトーン、しぐさまで、全部まとめてひとつのコミュニケーションですから、言葉だけに忠実だと、そのキャラクターがそのシーンで言いたいことが伝わらない。丁寧に頭を下げて「おつかれさまでした」と言うのと、「おつかれ」ってあっさり言うのとでは、まったく意味が違いますよ。だから「おつかれさま」の英訳は、毎回変えていますよ。

日本人がその映画を見たときに、どう理解するか。その理解を英訳する。日本人が見るように、アメリカ人にも見られるような字幕を目指しています。

観客が入り込みやすい字幕にすることは大切です。日本独特の文化や風習も、結局は人間の営みだから、誰にでも理解できるはずなんです。例えば「お盆」と出てきたら、「Obon」と訳さないで、「Day of the dead」とする。これはメキシコにもあるし、死んだ人を迎える日なんだと、アメリカ人でもなんとなくわかるんですよ。アメリカでは年々、字幕映画の配給が厳しくなり、今や劇場公開は全体の1パーセント以下。アメリカ人は、ただでさえ字幕を「バリア」と思っているので、映画の世界に入り込みやすい字幕、自分が

※1 日米安全保障条約。1960年1月、日本とアメリカ合衆国の安全保障のため、日本にアメリカ軍を駐留することなどを定めた条約。



すっかりこの映画の世界に入って、字幕を読んで
いることさえ感じさせないような字幕を心がけて
います。コメディ映画ならば、冒頭から細かい
ギャグまでちゃんと訳したり、「この映画の理解
するべきところを、全部しっかり理解している」と、
見る人に自信をつけてあげるような字幕ですね。

ご自身でぜひ字幕を付けたいと思うのは、
どんな映画ですか？

描きたい世界とか、伝えたい考え方や
姿勢、「これをお客さんに伝えたい」という
ものを、しっかりと持って作られた映画ですね。
そうでないと脚本もおもしろくないし、監督が
いくら演出をがんばっても、役者も意図を理解
しないままセリフをしゃべるから、すごく訳し
にくい。訳していて「セリフの意味をつかめて
いないんだな」と、すぐにわかりますよ。役者の
せいではなく、脚本自体がちゃんと書かれて
いない。逆に、何が言いたいのかきちんと伝わ
れば、同時通訳みたいに、ぱーっと英訳が思い
浮かびます。

生涯のテーマは「戦争と記憶」

字幕翻訳にとどまらず、ドキュメンタリー映画
のプロデュースなど、日本とアメリカの文化を
つなぐ活動をされています。その中で、アメリカ
に伝えたいことは何でしょうか？

日本の芸術家や作家の通訳もしています。それ
を通して伝えたいのは、「日本人も欧米人と同様に
賢くて、ちゃんと物事を深く考えていますよ」と
いうこと。欧米人は、そう思っていないですよ。
アメリカ人は、アジア人より自分たちの方が頭が
良いと思っているんじゃないかな。ソニーの製品



CATALOG

リトルボーイ

翻訳を担った村上隆
「リトルボーイ」展のカタログ

がどうかテクノロジーではなくて、哲学的な、
人間が生きていることについて深く考えられる知性、
ということです。日本ではそうした知性を持った
表現者がたくさんいますけれど、アメリカでは
ほとんど紹介されていないでしょう。紹介されて
いるのは、作家なら村上春樹や大江健三郎、
アーティストなら村上隆とか、ほんの一握りです
よね。今後も、日本の表現者を海外で紹介して
いきたいと思います。

逆に、日本に伝えたいことは？

自国のことを被害者としてだけみるんじゃ
なくて、そろそろ加害者としても近代史を勉強
させませんか、と。たとえば未だに、南京大虐殺に
ついてテレビで放送できない。過去を無視した
まま、今、再軍備して北朝鮮にどうのこうのって
いう議論があるのも疑問です。

軽々しく言っているわけではありません。2001年
に、『リーベンゲイズ』(※2)というドキュメンタリー
を字幕翻訳しました。これまでで唯一、無料で引き



MOVIE

日本鬼子 (リーベンゲイズ)

アメリカでは『Japanese Devils』と題
して、教育機関用のDVD、ビデオが
販売されている

受けた仕事です。14人の日本人戦犯が、強姦
強盗、略奪、放火など、日中戦争で中国人に対
して行なった残虐行為を告白するという内容で、
日本ではやっとの思いで公開できました。

逆に、広島・長崎に原爆を落としたのは
私の国。私も責任を取って、自分にできることを
しようと、長崎の原爆被害者についての作品も
英訳しています。

エンターテインメント映画の翻訳も大好きだけ
れど、いつも立ち戻るテーマは「戦争と記憶」
です。未来のために過去の戦争をどう振り返り、
その責任をどう取っていくべきか。それは、自分
の生い立ち、そして今の世界の状況が、そう
させているんだと思いますね。

Text by: トオヤマサヤカ

※2 松井稔監督作品『リーベンゲイズ(日本鬼子)』
(2001年)。1932年から15年続いた日中戦争中、中国
大陸で侵略戦争の実行者となった元皇軍兵士14人
を日本の各地に訪ね、彼らが行なった残虐行為の
告白を記録したドキュメンタリー。ベルリン、トロント
など各地の国際映画祭で上映され、日本では現在、
一部の自主上映会のみで鑑賞できる。



ホーグランドさんが翻訳を
手がけた『顔』(2000年)、
『ぼくち』(2003年)の
阪本順治監督(左)と談話。
右はスコットランド人俳優。

リンダ・ホーグランドさんが 字幕翻訳を手がけた近年の日本映画

『顔』(2000年/阪本順治監督)
『ウォーターボーイズ』(2001年/矢口史靖監督)
『千と千尋の神隠し』(2003年/宮崎駿監督)
『蛇イチゴ』(2003年/西川美和監督)
『アカルイミライ』(2003年/黒沢清監督)
『誰も知らない』(2004年/是枝裕和監督) など

※()内の年はアメリカでの公開年